

大野晋氏のご批判に答えて

——「日本語＝タミル語同系説」の手法を考える

山下博司

I. はじめに

1995年6月、国際日本文化研究センターを会場に、山折哲雄教授の司会のもと、大野晋（学習院大学）、長田俊樹（国際日本文化研究センター）、家本太郎（京都大学）、児玉望（熊本大学）と私・山下博司（東北大学）が参加して、シンポジウム「日本語の起源について——大野晋教授のタミル語起源説をめぐって——」が開催された。その後、1996年3月発行の『日本研究』第13集に、フォーラム「『日本語＝タミル語同系説』を検証する」と題して、長田俊樹、家本太郎、児玉望と筆者が大野説を検証する諸論放を寄せた。これらは、シンポジウムの内容をうけ、各自の学問的立場から、それぞれの方法論をもとに、大野晋博士（以下、大野氏）の所説を批判的に吟味したものである。

大野氏はそれをうけ、1996年12月の同誌第15集に「『タミル語＝日本語同系説に対する批判』を検証する」（以下、『検証』と略す）と題する論説を寄稿され、先の4名の批判に反論を試みられている。氏の矛先が、紙幅の制限の故とされているとはいえ、主として長田氏と山下に向けられており、とりわけ後者に対して、多くの紙数を費やして語気鋭く論駁されている。氏の議論を拝見すると、批判を受けた当事者として承服でき兼ねるところが多々見出されるのに加え、明らかに論点のすり替えと映る部分も少なくないため、大野氏が言及された諸点に的を絞り、反論を掲載させて頂くことにした。

本紀要の第13集でも述べたように、大野氏の仮説に付随する比較言語学的な諸問題・難点については、徳永宗雄氏、故村山七郎氏らによって1980年代に既に十分提起されている観がある。また今回も長田、家本、児玉の各氏が、ドラヴィダ言語学や比較言語学の最新の研究成果を踏まえて検証を行なっていることから、大方基本的な論点は尽くされており、現時点で筆者が改めて論を展開する余地もなかりうし、その力量も持ち合わせていない。よってここでは、前回と同様、あくまでも古今のタミル文献をもとに研究を進める一タミル学徒という立場を踏まえ、議論を具体的な対応例に限定し、当該の語彙、一々の用例に照らしながら、大野氏の所説及び手法に対して筆者が抱く疑義の一端を公にしたいと考える。

さて、先の筆者の論放の末尾（『日本研究』第13集、pp. 60—64）で、大野氏の『日本語の起源 新版』（岩波新書、1994年、以下『起源』と略す）に散見するタミル語のローマ字転写の誤りなど34箇所をリスト（一覧表）の形で列挙したが、それと同時に、紙幅と時間の関係で誌上で精細に触れ得なかった問題箇所として、計53の対応例について、やはり別表の形で掲げておいた。大野氏からは、『検証』の中で、これら53箇所の一つにつき詳しい弁明を頂戴す

るところとなった。『検証』を見る限り、筆者の指摘の趣旨が大野氏によって別様に理解されている節も無いとはいえず、リストの提示によって却って議論が紛糾する結果になった嫌いもある。何より、大野氏による問題の「すり替え」などに格好の機会を提供してしまうこととなってしまったように思われる。止むを得ぬ処置だったとはいえ、簡略なリストの形で提起したこと自体、あるいは適切を欠いていたかもしれない。

従って、ここでは改めて、筆者が本紀要の第13集で疑問として指摘した箇所を、大野氏が『検証』中で施された番号に沿いつつ紹介し、改めて一々の問題の所在を明示し、かつ大野氏の『検証』に対する反論を試みることにしたい。出来れば、『起源』巻末の対応語一覧、山下による問題箇所一覧表（『日本研究』第13集、pp. (62)–(64)、それに対する大野氏の抗弁（『検証』）の三者を注意深く対照しながら、以下をお読み頂きたい。大野氏の論法や資料の提示の仕方がいかに多くの問題を含んでいるか、順次明らかになるはずである。

なお、項目の引用に当たっては、煩雑と混乱を避けるため、大野氏が施した語中のハイフンは、省略させて頂いた。また大野氏の表記によるところの“r̥”は、国際的な趨勢に従って“ɹ̥”と改め表示することにした。

以下、議論の発端となった『起源』巻末の「日本語とタミル語の対応語一覧」における例に倣い、大野氏が『検証』p. (46)から p. (62)にかけて掲げた項目(1)~(53)に沿いつつ、左が日本語、右が氏によって対応するとされたタミルの語彙と語義を示す。下線を施してある語義は、山下が、第13集所収の論攷の中で、特に疑問として指摘したタミル語の語義である。各項目の1行目に太字で掲げた日本語＝タミル語の対応語の行右端にポイントを下げて記した頁番号は、大野晋『日本語の起源 新版』巻末「日本語とタミル語の対応語一覧」の当該頁を指す。

また、大野氏の『検証』等の当該箇所における誤植や引用の誤りなどについては、混乱を避けるため、冒頭に※を付し、活字のポイントを下げ、かつ字下げを施した上、各項目本文の末尾に加えておいた。

『以前』と『起源』において“F”と表記されていた発音記号が、『検証』中では、ことごとく“f”に改められている。表記に統一を欠いているのである。本稿では、読者の混乱を避けるため、筆者の判断で、“F”に統一し議論を進めることにする。

以下に、本稿でしばしば言及するであろう大野氏の著書・論文と本稿における略称とを一括して掲げておく。

『以前』……大野晋『日本語以前』岩波新書、1987年12月

『起源』……大野晋『日本語の起源 新版』岩波新書、1994年6月

『検証』……大野晋「『タミル語＝日本語同系説に対する批判』を検証する」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第15集、1996年12月、pp. (1)–(63)

また、本文中で用いた略号は以下の通りである。

DED……T. Burrow & M. B. Emeneau, *A Dravidian Etymological Dictionary*,

Oxford: Oxford University Press, 1961.

DEDR……T. Burrow & M. B. Emeneau, *A Dravidian Etymological Dictionary*
(second edition), Oxford: Oxford University Press, 1984.

TL……*Tamil Lexicon*, 6 vols. and supplement, Madras: The University of
Madras, 1924-39.

II. 「対応語一覧」の問題箇所の再吟味——大野氏の反論に答える——

(1) kasu (滓) —— kacatu (滓)

『起源』巻末対応語一覧 (p. 3)

『起源』に先立つ『以前』(p. 130f.)の中で、日本語“kasu”の対応語として挙げられていたタミル語は“kāṭi” (DEDR 1436)であった。『起源』の対応語一覧では、“kāṭi”が放棄され、それとはまったく異なる“kacatu”が、対応語として新たに挙げられている。それはともかく、大野氏は『起源』の対応語一覧中で“kacatu”の語義を「かす(滓)」として片づけている。これが問題であるとして筆者は指摘したつもりである。“kacatu”の語は、基本的には「過失」「欠陥」の意である。さらに、DEDR や TL 中で与えられている語義中の“stubble”、“sweepings”、“rubbish”を、単純かつ一律に「かす」として片づけ、日本語“kasu”と対応させようとするということにも問題があるろう。

大野氏は、『検証』p. (47)で、“kacatu”の意味を「かす」としながらも、“kacatu”が“dregs (かす)”であることを表す文例が未だ見つからないと述懐している。とすれば、『起源』(対応語一覧 p. 3)で“kacatu”を「かす」とするのは早計であったことを、ご自身が認めになったことになる。ドラヴィダ“語族”ではなくタミル語を比較の対象として扱い、ドラヴィダ語族の cognates を一々検討することに、大野氏は第一義的な重要性を認めていない旨を方々で繰り返し説きながら、ここでは他のドラヴィダ諸語を自由に参照し、「かす」に似た語彙の存在をほめかしている。氏は「このように使用する地域が広い単語あるいは意味は大体古いものである」(『検証』p. (47))と言われるが、そうだとすれば、(自説に都合のいい語彙だけではなく)他の語彙についても、ドラヴィダ諸語の cognates に広く目を配り、参考に供しつつ々々を分析して然るべきであろう。ここではたまたまマラーラム語、カンナダ語、テルグ語の対応語彙と語義の一部を掲げているが、語義の選択が恣意的・便宜的に過ぎるように思われるのである。

また氏は、『検証』p. (47)で、“kacatu”の用例を紹介する中、その語を含む箴言集 *Tirukkural* を紀元後3世紀の作品とされているが、成立をそれより数世紀降らせるのが学界の定説である。氏は、全体に作品の成立を古く査定する傾きをおもちのようで、『検証』p. (14)でも、(Zvelebil や筆者の指摘にも拘わらず)文典 *Tolkappiyam* を紀元前のものと断じておられる。⁽¹⁾インド系研究者が概して資料の成立年を遡らせて見積もる傾向があること、及び古く設定したほうがご自身の所説にとって多少なりとも有利に働くという二点のゆえと思われるが、比較言語学的な議論をされるのであれば、年代の扱いは、学界の趨勢にも配慮を怠らず、出来る限り慎重かつ細心に行なって欲しいと思う。

(2) kado (門) —kaṭai (門・入口)

(p. 3)

タミル語の“kaṭai”を「門・入口」としているが、基本義は「おわり」であり、「出入口」「扉」に当たる例はごく一部であるから、問題ありとして指摘した。ことさら好都合な語義を抽出し、強調している印象が否めない。

(3) kata (潟) —kaṭal (海・浅瀬)

(p. 3)

大野氏は、タミル語“kaṭal”に「海」のみならず「浅瀬」の意味を与えているが、承服し難い。タミル語辞典のいずれにも「浅瀬」という語義は見当たらないし、実際の用例に照らしてみても、“kaṭal”を「浅瀬」と解することには無理がある。しかも、原典を紐解いてみると、大野氏が掲出する *Narriṇai* 38の7行目には、“kaṭal”なる語は見えず、あるのは“kali”の語であって、⁽²⁾“back-water, shallow sea-waters, salt river, marsh”を表す。皮肉だが、こちらの方が「浅瀬」にやや近いようにも見える。大野氏は、『検証』p. (48)で「文例で分かるように浅瀬にも使う」と断言するが、ご指摘の箇所にもそのような語はまったく存在しないのである。偽って用例を掲げることはよもやあるまいから、少なくとも“kaṭal”と“kali”を錯乱しておいでなのではあるまいか。繰り返すが、“kaṭal”そのものに「浅瀬」の意味は無い。ドラヴィダ諸語の cognates を見渡してみても、そのことは明らかである。『以前』p. 108 では、Sanmugadas (サンムハダース) 女史が「浅瀬」の意味を支持している旨を述べているが、読んでみると「遠浅の海も“kaṭal”に含まれ得る」というほどの趣意であって、“kaṭal”=「浅瀬」と断じているわけでは決していない。

(4) kaṭa (河) —kavar (河)

(p. 3)

タミル語“kavar”を「河」とする論拠に乏しい。氏は、『以前』p. 108f. において、日本語の「河」の原義を探るのにアイヌ語の例などを引き合いに出しているが、やや見当外れであり、妥当な議論とは言えない。『以前』p. 109、『検証』p. (17)に掲げられた文例の日本語訳にも問題がある。“kavar”は枝、川、三叉戟などの「分岐」「支流」「分かれた先の部分」を指す。「川」そのものの意味はない。

『起源』に先んじて出版された『以前』p. 108f. では、比較的正しく語義が提示されているのに、『起源』のリスト中では「川」という訳語のみが与えられ、他の語義は切り捨てられている。対応ないし一致がことさら強調されるよう仕組まれており、一般読者が容易にミスリードされるような書き方が敢えて選ばれているのは残念である。

(5) *karu > kayu (粥) —kali (粥) (*は推定形であることを示す。以下同様) (p. 3)

タミル語“kali”については、大野氏の掲げる *DEDR* 1387は該当しないという趣旨で、ここを問題箇所として指摘したつもりである。*DEDR* 1378が正しい。混同されたのではあろうが、大野氏は、『検証』p. (48)の中で、自らのミスに言及することなく訂正を施している。

(6) karu (刈る) —kalai (刈る)

(p. 3)

タミル語 “kalai” の意味を大野氏は「刈る」とし、日本語 “karu” (刈る) と対応させている。しかし “kalai” は「抜き取る」「摘み取る」「除き去る」の意とすべきで、植物や雑草を除くだけでなく、「(靴など、履物を) 脱ぐ」の意にもごく普通に用いられる。先の『以前』 p. 204 では、概ね正しい語義が紹介されていたのに反し、『起源』のリスト中では敢えて「刈る」のみが掲げられており、日本語 “karu” (= 刈る) との意味の一致が故意に強調されている。

※『検証』中で大野氏が掲げる例文の出典は、*Perumpāṇ.* 213 から *Perumpāṇ.* 212-213 へと改められなければならない。また、例文中の “tanta” と “neytal” の間には “kaṇaikkāl” が補われるべきで、氏の引用は正確さを欠いている。

(7) kara (族) —— kāl (親族)

(p. 3)

この項目については、タミル語 “kāl” に直ちに「親族」の義を充てるのが不適当として指摘した。大野氏は、『検証』の中で p. (28) から p. (29) にかけて 1 頁半近くにわたって反論を展開されている。氏は、例によって Kothandaraman (コーダンドラーマン) 教授の言を引用して拠り所としつつ、*TL* と Winslow のタミル語辞典の記事を引き合いに出して、抗弁されている。しかし古典からの実例は一切提示されていない。大野氏は、“kāl” に「血筋」「血統」に類する語義があり、それは複合語表現——例えば “iraṇṭāmkāl (sic. 項目末尾の※を参照)”、“kālvālī”、“kāṇmuḷai” 等——の検討からも示唆されるという。確かに、*TL* (p. 890) の第18義に “family, relationship” とあり、“kālvālī” なる同義語が掲げられている。同じく第11義には、“degree of consanguinity or affinity” (= 親等) なる語義も提起されている。だから、“kāl” = 「親族」としてどこが悪いかというのである。氏の説は理に適っているのかのように見える。しかし、果たしてそうなのであろうか。

“kāl” の語は、「脚」「足」ないし「肢」を基本義とする。転じて、「下部」「底部」「根元」などの意味が派生し、一方で「分岐」「支流」「道」などの語義も生まれることになる。“kāl” が「4 分の 1」を表すのも、「四肢」の概念と無関係ではない。“kāl” が “family, relationship” の意となるのは、血筋が、子々孫々にわたって枝分かれしリネージ・一族を構成していくからである。Kothandaraman 教授が、“iraṇṭāmkāl” (sic.) を “second generation” ではなく “second branch” であると発言したのも、そのような語感の故に相違ない。

氏がご自身の所説の弁護のために掲げる “kālvālī” なる複合語にしても、文字通り「足(で歩いた) 道筋」、すなわち「足跡」を意味し、「血筋」等の義は、それから派生した二次的意味に過ぎない。

“kāl” の基本義や背景にある觀念に思いを致すことなく、また古典からの用例もまったく示さないまま、一部の辞書的な意味のみを盾に、単純に “kāl” = 「親族」として片付けてしまうことは危険である。

※ sandhi の規則により、“iraṇṭāmkāl” は “iraṇṭāṅkāḷ”、“mūṇrāmkāl” は “mūṇrāṅkāḷ” と表記されるべきであるが、『検証』 p. (28) から p. (29) にかけて、3 カ所にわたって同様の間違いが繰り返されている。

(8) kamu (神・支配者) —— kōmān (超能力をもつもの・王)⁽³⁾

(p. 4)

大野氏が、“kōmān”を「超能力をもつ者」と解することを疑問として、この箇所を指摘した。

ジャフナ大学 (スリランカ) の Sanmugadas 教授は“kōmān”を「superpower をもつ支配者」と解して見せたというが (『検証』 p. (48))、それは“kō”ないし“kōmān”の意味内容を古代・中世タミルの宗教文化的な文脈から導き出したもので、その見解自体は荒唐無稽なものではないにしても、厳密な意味での「語義」とは別様のものである。タミル古代の王と神聖力 (sacred power) との関連は、さまざまな研究で明らかにされているところであるが、⁽⁴⁾ “kō”という語そのものが“superpower”的な含意を有するわけではない。

また、大野氏の説明によれば、タミル語の“kō”には「牛」「天空」「大地」「インドラの武器の雷・矢」の意義があり、従って「牛は神である」とのことである。「牛」の意味の“kō”は、まったく別の語——サンスクリット語の“gau” (プラークリット語では“go”)——からの派生であることは明らかであるから、この議論はまったく当を得ていない。“gau”は祖語形 **g(w)ōu-*, **g(w)ow-* にも遡及し得るインド・ヨーロッパ系の古い語彙で、言うまでもなく、英語“cow”、ドイツ語“Kuh”等と同源である。

大野氏の議論では、タミル語本来の“kō” (=king) と、サンスクリットに由来する“kō” (<gau, =cow) との基本的な識別が為されておらず、明らかな混乱が見られるのである。両者は区別して扱われるべきで、そうすれば、「牛は神である」がごとき短絡的な発想の余地は無いはずである。というより、大野氏は自説を展開する必要上、故意に二者を同一の語と認めている節がある。なぜなら、Winslow のタミル語辞典や TL では、これら二つを別々のエントリーに分けて解説しており、そのことは大野氏は百も承知のはずだからである。また、氏は“kōmān”と日本語の“kamu”(=神)とを対応させているが、“kō”は本来的に「王」であって、「神」の意は二義的であり歴史的にも新しい。元来南インド・ヒンドゥー教における人格神のイメージ形成が、覇王のそれを一つのモデルにして図られた結果、神が「王 (kō)」という単語でも言及されるようになったに過ぎない。⁽⁵⁾ その証拠に、大野氏が『検証』 (及び近著『神]) の中で引く用例のうち、“kō”が「神」と訳されているものは、すべてバクティ期以降、すなわち7世紀以後に成立した文献であり、また「王」と訳されているものは、それ以前の時代に属する文献である。大野氏の提示している諸用例は、はからずも、タミル語“kō”の意味内容の歴史的成長の跡をよく反映したものとなっている。以上のことから、タミル語の“kō”を日本語“kamu”と起源的に対応させることは見当違いである。

※『検証』 p. (49) の“kōmān”は、正しくは“kōmān”とあるべきである。

(9) kōru (凍る) (古語) —— kuḷir (寒さでかがまる)

(p. 4)

大野氏は『起源』 (対応語一覧 p. 4) で、タミル語“kuḷir”を「寒さでかがまる」意としている。“kuḷir”に「凍える」「寒い」などの語義はあっても、「かがまる」のごとき含意はないはずであるから、そのことに注意を喚起するため、ここを問題箇所として指摘した。

タミル語のみならず、ドラヴィダ語族中の cognates を博搜しても、それに類する語義は見当たらない。大野氏は、今回の『検証』中で（それに先立つ『起源』で「寒さでかがまる」としたことには一切触れぬまま）、その意味を黙って引っ込め、「冷たい」「死んだように感覚を失っている」と改めておいでである。大野氏が新たに掲げている用例にも「寒さでかがまる」を表すものは一つもない。『起源』中に明記されていた「“kuḷir”=寒さでかがまる」は、私の指摘のあと、『検証』の中でいつの間にか隠蔽されてしまっている。

(10) agu (挙ぐ) —— ōnku (あげる)

(p. 5)

『起源』中で大野氏は、タミル語 “ōnku” に、「あげる」と他動詞的な意味のみを掲げている。タミル語の “ōnku” には、他動詞としての用法も確かにあるが、「あがる」ないし「高まる」として自動詞的に用いられることが遥かに多いから、筆者は、氏の “ōnku”=「あげる」という意味提示を問題ありとして指摘したつもりである。

大野氏は、私の指摘を受けたのち、『検証』p. (49)で、何の断りもなく “ōnku” に自動詞的な語義を追補している。そればかりか、英語による “ōnku” の意味説明のあとに、日本語で「昇る」「上がる」と自動詞的な訳語のみが掲げられている。これでは、英語の部分をとばして読めば、“ōnku” が自動詞との印象をもたされることになる。『検証』の段階で、“ōnku” を自動詞とする巧妙なすり替えが為されているのである。問題はそれだけではない。“ōnku” に対する日本語の対応語のほうも、『起源』の「挙ぐ」から、「上がる」に訂正され、自動詞であることを示す表現に変えられている。こうせざるを得なかったのは、氏が掲げるタミルの例文中で、“ōnku” が自動詞的に用いられているからにほかなるまい。つまり、例文を引用する段階で、“ōnku” を（他動詞ではなく）自動詞として提示する必要が生じたのである。挙げられた用例も、TL, p. 618 の例文 (*Purapporulvenpāmālai* 4. 13) をそのまま借用したものにとどまっている。

なお、そもそも『以前』p. 161 では、タミル語 “ōnku” を日本語 “agamu” (崇める、高いものと扱う) に対応させており、統一を欠く印象が否めない。“ōnku” をめぐる対応については、大野氏の側でも、扱いがまだ揺れている感がある。確定的な見解を提示して欲しいものである。

(11) suru (奪る) (古語) —— cūrai (強奪する)

(p. 6)

同様に不可解な態度は、この項目についても認められる。大野氏は先の『起源』では、タミル語 “cūrai” を、「強奪する」としていた。しかし “cūrai” は名詞でなければならない。筆者はそのことを問題にして、この箇所を指摘したつもりである。

ところが大野氏は、私の指摘を受けるや、『検証』中で、この語を動詞とする説明を黙って引っ込め、“cūrai” を今度は “robbery, dacoity, pillage” という名詞として定義を改めている。自らが先に提示していた語義を放棄するに当たっては、その旨を断り、修正するに至った理由・経緯を付した上で、所説を改めるべきであろう。それを敢えて怠ることは、何よりもイノセントな読者の目をくらまし、欺くことになる。自らが書物に記した内容に、著者

は責任を負って然るべきであろう。

※大野氏が『検証』p. 50に掲げた例文中の“cuinnam um”は、“cinnamum”とあるべきである。

(12) sō > se (背) —— cuval (肩の上部)

(p. 6)

タミル語“cuval”は、大野『起源』では「肩の上部」としてあった。『以前』(p. 121)では「うなじ」「背後」となっている。確かに *DEDR* にも“back”の語義が無いわけではないが、本来的には「うなじ」である。大野氏は、それを敢えて「背中」ととり、日本語の“sō” (背) と対応させている。大野氏の掲げる *Kalittokai* からの例文は、*TL* に“upper part of the shoulder”の意味を表す例として掲げられているのをそのまま流用したものである。大野氏はこれを「背中」の例として挙げているわけであるが、従来通り素直に「肩の上部」と解しても、何ら問題の無いところである。大野氏は、ある日本語とタミル語の単語同士が対応すると判断するや、今度は、その“対応”を盾に——あたかもその“対応”が既成事実であるかのように——“対応”する一方の側である日本語の単語の意味を以て、タミル側の語義を再解釈してしまう嫌いがある。日本語の色眼鏡を通してタミル語を見るのである。タミルの“cuval”を「背中」として片づけてしまうなどは、その典型的な事例である。

※ついでに指摘すれば、出典の表示は“*kali*. 56: 4”ではなく“*Kali*. 56: 3-4”とすべきであるし、例文中の“kuṛai”も“kūṛai” (kūlai) でなければならぬ。

(13) sira (白) —— teḷi (白くなる)

(p. 6)

タミル語“teḷi”は、大野氏の掲げる「白くなる」でなく、むしろ「輝く」ないし「わかる、明らかに」なるとすべきである。この意図をこめて、この箇所を指摘した。「白くなる」という義は、この語にとって第一義的なものではまったくない。『以前』p. 180f. における語義の提示も、“teḷi”のもつ最も基本的な意味の一つである「わかる、明らかに」にまったく顧慮が払われておらず、適切でない。大野氏は、『検証』中でも「白くなる」という語義に拘泥している。それは日本語“sira”との対応を強く意識しているからにほかならないが、「白い」が本来的な意味でないことは、ドラヴィダ諸語の cognates を見渡せば、自ずから明らかである。大野氏が挙げた例文 (*Maturaiḱkāñci* 444) は、“teḷi”が「白い」を表すことを示す意図をもって掲出されたのであろうが、当の“teḷi ari”は、大野氏の訳すように「白い真珠」ではなく、「輝く宝石」とするのが一般的であり、不都合も生じない。

(14) nasu (成す) —— nāṭṭu (成す)

(p. 7)

大野氏は、タミル語“nāṭṭu”を「成す」とするが、基本的には「立てる」とでもすべきであろう。*DEDR* 3583 には、動詞“nāṭṭu”の語義として、“to set up, fix, plant, place in the ground (as a pole), erect, insert, establish one in life, create, write (with style on the palm leaf)”が挙げられている。大野氏は、この中の“to set up, to plant, to create”のみを抽出して紹介し、しかも「成す、創出する」との日本語まで付している (『検証』p. 50)。しかし、この日本語訳は、言うまでもなく、“nāṭṭu”の語義のごく一部を成す“to create”の訳語に

過ぎず、“nāṭṭu”の語義を代表するものではない。同様の難点は、『以前』p. 231 についてもあてはまる。

大野氏は、『検証』p. (50)で、*Cilappatikāram* の冒頭部分から用例を引き、“nāṭṭu”が「作り出す」を表す事例を紹介している。例文は *TL*, p. 2205 からそのまま転用したものであるが、この例は、「作る」というより、「書く、書き記す」という意味での「創作する」であり、その結果、巷に根づき、定着し、評判になるの含意までも有している。日本語の対応語とされる“nasu”とは、大きくニュアンスを異にしていると言わざるを得ない。従って、用例として相応しいものとは言えない。さらに、大野氏は用例中の“yām”を「私」とされているが、一人称複数の「我々」と改めるべきであろう。

『検証』p. (51)で、大野氏は、“keṭṭi” (*DEDR* 1144) の意味を“to be clever”とされているが、*DEDR* にも *TL* にも、当該語彙にそのような訳語は見当たらない。“keṭṭi”は、飽くまでも名詞である。

※『以前』p. 231 に、例文の出典の表示に“*Cilappu* 60”とのみあるのは、不完全である。*Patikam* の章（一種の序章）の60行目なることを明記すべきである。（『検証』p. (50)のほうは、その旨が言及されているので可としたい。）

(15) musu (隠す) (方言) —— muṭu (隠す)

(p. 7)

『起源』に“muṭu”とあるのは、“mūṭu”の誤りである。これは筆者が本紀要第13集に掲載した問題箇所一覧の p. (62)で指摘したが、それをうけて、大野氏の『検証』中では黙って訂正してある。この項目については、上の誤りに加え、意味を「隠す」ではなく「覆う」とすべきであるという趣旨もあって指摘した。大野氏は、『検証』では、これまでの「隠す」に加えて「覆う」の義も出されている。掲げられた用例も、「隠す」というより「覆う」意のものである。しかも、掲げられた二つの用例が、片や *Kamparāmāyaṇam*、片や *Tiruttonṭar-purāṇam* (alias *Periyapurāṇam*) と、ともに紀元後12世紀前後のバクティ的なヒンドゥー教文学であり、「サンガム期のタミル語彙を比較に用いている」と豪語される（『検証』p. (25)）にしては、成立時期が降り過ぎているとの感を免れない。

(16) masu (枡) —— maṭṭu (結ぶ・終わりになる)

(p. 7)

これは筆者の単純なミスタイクである。大野氏の“maṭṭu”に対する訳語「計量器」が疑問である旨を指摘するつもりだったが、書く段階で次行の“muṭi”（結ぶ・終わりになる）の記述と混乱してしまった。ミスをお詫びし、指摘箇所を「masu (枡) —— maṭṭu (計量器)」と改めさせていただきたい。

さて問題のタミル語“maṭṭu”であるが、この単語は「分量」を指す言葉であって、「計量器」のことではない。日本語「枡」との対応関係は再考されるべきであろう。同じ誤りは、『検証』p. (51)の項目(14)でも繰り返されている。*DEDR* に“measure”とあるのを単純に読み違えたか、Sanmugadas 女史の言（『以前』p. 165f.）をそのまま採用したのであろう。

(17) tambo (田んぼ) —— tampal (泥の水田)

(p. 11)

タミル語 “tampal” の語義であるが、*TL*, p. 1752 には、大野氏も指摘するように “hardening (大野: hardenning) of rice-fields after heavy rain” とある。氏はこの英文の意味が曖昧とし、いくつかの連語的表現を引いて、「tampal は泥田であることがわかる」と結論づけている。しかし、上に挙げた *TL* の語義解説は極めて明解で、「雨が降り続いたあと田が固まること」の意を表し、verbal noun に由来する。

ところが、この “tampal” について、大野氏は『以前』 p. 141f. で、Murthy (ムールティ) 氏や Sanmugadas 女史の「川傍の泥地」とする意見をそのまま踏襲して提示している。次の『起源』 p. 90 でも、やはり「泥んこの田、水田」として紹介している。*TL* や *DEDR* の “hardening of rice-fields after heavy rain” という定義は、まったく顧みられていないのである。大野氏の議論には、文献的な証拠も何一つ挙げられていない。*TL* にも用例が掲げられていないことから分かるように、おそらく文献に例が無く、また (J.) の記号から推測されるように、スリランカ・ジャフナ地方の用語であるらしい。同地出身の Sanmugadas 女史に聞き覚えがあるのは、このことと関係しているのでもあろう。

大野氏の所謂「タミル語 = 日本語同系説」にとって、“tampal” を「田」として同定することは、極めて重要な意味をもっているようである。ところが氏は、『検証』 p. (19) で、*TL* を農業用語に弱いものとして一蹴し、それに代わって知己——しかもこの場合、(タミル系の) スリランカ人——からの伝聞に多く頼ろうとされている。ご自身の所説に大きな意味をもつ対応関係であれば、その立証に当たっては、自らフィールドワークなどによって広範に用例を採集され、説得力をもたせるよう努められるべきであろう。

(18) tabi (旅) —— tavar (仮りに宿る)

(p. 11)

大野氏は、タミル語 “tavar” を『起源』中では「仮に宿る」としていた。その語義が不適当として、この箇所を指摘した。

『検証』中では、“to stay, abide” の義を “tavar” のものとして紹介している。*DEDR* 3113 の該当箇所を引用してみよう。

3113 Ta. tavar (-v-, -nt-) to abstain, refrain, cease, become extinct, stay, abide, subside, abate, leave, separate from, forsake, shun, avoid, omit, renounce, give up, cease from; (-pp-, -tt-) to put away, remove, dispel, chase away, expel, exclude, discontinue, hinder, restrain; …… (波線は筆者)

これから見ても察しがつくように、タミル語 “tavar” の基本義は、一言で言えば「控える」ないし「除く」である。大野氏の強調する “stay, abide” の義は、飽くまでもごく一部に過ぎない。その場合でも、“tavar” のもつ基本義から推して、「引っ込んでいる」「控え居る」「引きこもる」「身を引く」の含意をもち、日本語の “tabi” とはきわめて大きなズレがある。これこそ、大野氏が『起源』 p. 23 で力説するところの「無効な対応語」の一例である。

(19) wada (入江) (古語) ——vaṇṭal (川や湖で岸を洗われている所) (p. 12)

タミル語 “vaṇṭal” を、大野氏は「川や湖で岸を洗われている所」とし、日本語の wada (入江) と対応させている。ところで、DEDR 5237 を見ると、“dregs, lees, sediment, mud, mire, slush” に続いて、“earth (大野氏は “earth” と誤記) washed ashore by a river, lake, etc., alluvial soil” となっている。(これらは TL, p. 3480 の “vaṇṭal” の語の第 4、5、6 義に当たっている。) 氏は、こうした意味記述のうちの前半部分 (= “dregs, lees, …”) を無視し、“earth washed ashore …” のみを取り上げ、“vaṇṭal” = 「川や湖で岸を洗われている所」としたものと思われる。

DEDR の同じエントリー中に掲げられたドラヴィダ諸語の cognates の語義をよく検討すれば、むしろ大野氏が無視した語義のほうが根本的・本質的であって、基本的に「かす」「くず」「沈殿物」を意味することがわかる。大野氏によるタミル語の語義の選択・確定は多分に恣意的なのである。氏が採用している “earth washed ashore …” にしても、この英語表現からも、さらに TL の第 5 義 (“earth washed ashore by …”) に、タミル語で言い換えて “nir otukki viṭṭa maṇ”, すなわち「水が(波などの力で)堆積させた土」とあることなどからも分かるように、どこかの「場所」(locality) を示す語彙ではなく、むしろ「土」であり、「川や湖のほとり・岸辺に堆積した砂ないし土」を指していることは明らかである。これを以て日本語 “wada” (入江) と対応させるのには無理がある。例文中の “vaṇṭal” の訳語にしても「沖積地」である必然性はないし、出典自体、紀元後 12 世紀頃の成立と見られる *Kalīṅkattupparani* というチョーラ期の頌徳文であって、年代がかなり降るのも気になるところである。

(20) nasu (生す・成す) ——nāṭṭu (創成する) (p. 12)

これは項目 (14) と重複する。この対応の問題点については、(14) をご覧頂きたい。大野氏は『検証』p. (19) で、この重複をとらえて、「その理由も不明である」とされているが、この対応が『起源』巻末の対応語一覧表の 2 箇所 (pp. 7, 12) にわたって挙げられているので、問題箇所を示す私のリストの中で、その都度指摘したまでである。

(21) niru (似る) ——nēr (似る) (p. 13)

大野氏はタミル語 “nēr” を “to resemble, equal (似る、同等である)” として紹介し、日本語の “niru” と対応させている。しかし、“nēr” の語義中、上のような意味はごく一部に過ぎない。“nēr” の語の表すところは、一言すれば「あう」ないし「向かう」である。参考までに、DEDR 3770 において(自動詞としての) “nēr” に与えられている語義を残らず列挙すると、以下のようになる(波線は筆者)。

to meet, approach, come near to, obtain, agree, consent, resemble, equal, be fit, appropriate, seize, take hold of, grant, bestow, happen, occur, transpire, appear, come to view, oppose, resisit, encounter, attack, consecrate, dedicate, resolve, take a vow, entreat, pray

大野氏は、この中から “to resemble, equal” のみを抽出し、日本語 “niru” (似る) に対応させている。かなり粗雑で、我田引水の的なものと言わざるを得ない。

※なお、大野氏が『検証』p. 52で掲げる例文は、*Aiṅk.* 135 の詩全体に及ぶから、典拠の表記を “*Aiṅk.* 135: 2” としているのは不適切である。

(22) *Fineru* (ひねる) — *piṇai* (ひねる)

(p. 13)

大野氏は『起源』において、タミル語 “*piṇai*” に「ひねる」の訳語を与え、日本語 “*Fineru* (捻る)” に対応させている。“*piṇai*” の語義を「ひねる」とするのは不相当だとし、私は指摘したつもりである。“*piṇai*” は「合わせる」ないし「合わさる」とでもするのが正しだろう。

ところが、大野氏は『検証』で、一言の断りもなしに「ひねる」の義を引っ込め、*DEDR* 4160 で与えられている語義中の “to entwine, conjoin, unite” のみを抽出して紹介し、「からめる」「巻きつける」と日本語訳まで施している。『起源』で出していた「ひねる」は、どこに行ってしまったのであろうか。こうした態度は責任ある著者のそれとは言えまい。

※タミルの例文の出典として “*Kali.* 106: 32” とあるが、“*Kali.* 106: 32-33” と正すべきである。

(23) *Fata* (母親) (方言) — *paṭu* (生む)

(p. 13)

大野氏はタミル語 “*paṭu*” を「生む」とし、日本語の方言 “*Fata*” (母親) と対応させる。ただしタミル語 “*paṭu*” を「生む」とするのには同意し兼ねる。大野氏の指す “*paṭu*” (*DEDR* 3853) は、ふつう自動詞的もしくは助動詞的に用いられ、基本的に「起こる」ないし「被る」の意味を表す。

(24) *Fatu* (泊つ) (古語) — *paṭi* (停泊する)

(p. 13)

大野氏は『起源』中で、日本語の古語 “*Fatu*” (泊つ) に対応すべきものとしてタミル語の “*paṭi*” を持ち出し、その意味を「停泊する」としている。筆者は “*paṭi*” に与えられた意味が疑問であるとして、この箇所を指摘したつもりである。

ところが、『検証』では、この「停泊する」という語義が “*paṭi*” そのものの意味から削除され、代わりに(「停泊する」を支持するものとして)タミルの文例が一例掲げられている。ちなみに、大野氏が依拠しているとする *DEDR* 3848 の “*paṭi*” (自動詞) の語義を挙げてみよう。

to settle (an dust or sediment), rest (as clouds upon a mountain), roost, be subjugated, trained, tamed, become orderly, obey, sink in water, be immersed, subside (as water)

以上のように、*DEDR* 3848 中に、“*paṭi*” を「停泊する」とすべき記述を見出すことはできない。*TL*, p. 2435 の当該項目に当たっても、結果は同様である。氏が「停泊する」を支持する文例として挙げている一例 (“*turaipati yampi*”: *Aiṅk.* 168: 2) にしても、「(舟などが) 停泊する」意の “*paṭi*” の用例というより、単に「とどまる」の例とすべきである。「舟」を

意味する語と共に現れているからこそ、たまたま「停泊する」の意を帯びているだけであって、“paṭi”の語そのものが、文脈から独立して「停泊する」の義を有するわけではない。従って、『起源』で提示されている語義「停泊する」は無効である。

(25) **Fatu (初)** —— **paṭu (最初に生じる)**

(p. 13)

タミル語“paṭu”の意味として挙げられた「最初に生じる」が不適切であるから、この箇所を異議ありとして指摘した。“paṭu”の基本義が「起こる」ないし「被る」であることは、項目(23)で既に述べた通りである。

(26) **Fatakē (畠)** —— **paṭukar (陸田・水田)**

(p. 13)

“paṭukar”を「水田・陸田」として、日本語“Fatakē”に対置することの有効性については、筆者が既に『日本研究』第13集所収の拙論(pp. 51)―(53)で疑念を差し挟んでいる通りである。要は、“paṭukar”のより重要かつ古い語義を無視し、典拠・初出などに疑問の残る“rice-fields”、“agricultural tract”(TL, p. 2411f.; DEDR 3856)のみに光を当てることが、果たして妥当か否かということである。

(27) **Fara (天の原)** —— **param (空)**

(p. 14)

『起源』において“param”を「空」としているが、これには疑義がある。むしろ「天界」とでもすべきところであろう。「空」にはまったく別の単語が用いられる。ちなみに、ムルガン神の聖地に Tirupparaṅkunru ないし Tirupparaṅkunram という山があるが、これは「聖なる(tiru)天界(param)の山(kunru)」であって、「聖なる空の山」ではない。さもないとすれば、この山がタミルの宗教的伝統において「地上の天界(taraivicumpu)」などとされ、聖地とも見做される意味がなくなってしまうであろう。

大野氏は、『起源』において、この“param”を DEDR 3949 に基づくとしている。ところが、当該項目はタミル語の動詞“para”とそれに対応・関連する語彙をドラヴィダ諸語から集めた項目であって、ここで問題になっている“param”の語は、そこには見当たらない。従って、『起源』中の、DEDR 3949 を典拠とする大野氏の説明はまったくの見当違いであることがわかる。

以上のように、二つの点——すなわち“param”を直ちに「空」としていること、及び“param”を DEDR 3949 と関連づけていることの2点——から、この対応に問題ありとして、筆者は指摘したつもりである。

ところが大野氏は、筆者の指摘を受けるに及び、『検証』中で、こともあろうに DEDR 3949 を黙って引っ込め、代わりに TL, p. 2499 を持ち出してきた。“param”を、DEDR に求め得なかったのは、編者である Burrow と Emeneau が“param”を無条件にドラヴィダ起源の語彙とは認定していなかったからにほかならない。タミル語“param”はサンスクリット“para”からの派生と見るのが一般的である。男性名詞形“paran”が「神」、特にシヴァやヴィシュヌなどの「最高神」「至高神」を表示し、サンスクリットの男性名詞“para-”に

対応している事実からも首肯される。『検証』で大野氏が関連語彙として掲げているタミル語 “paravai” (=広がり、範囲、表面、海など) は、動詞 “para” の派生語であって、“param” とは起源的に関係しない。

さらに驚くことに、大野氏は、『起源』中で「空」としていた “param” の語義を、筆者の指摘を受けるに至って引っ込め、何の弁明も説明もなしに「空」を “heaven” と訂正されている。「空」と “heaven” とは似て非なるものである。改めるに当たっては、それなりの正当な理由が明記されて然るべきである。それがまったく為されていない。マドラス大学タミル文学科の Kothandaraman 教授は大野氏の説明に納得したそうであるが、上に述べた氏のやり方は、学問的見地から見ても、あるいは読者に対しても、誠意ある態度とは言えない。

(28) FaraFu (祓ふ) —— paravu (捧げ物で罪を除く)

(p. 14)

筆者は、大野氏がタミル語 “paravu” に与えている「捧げ物で罪を除く」という語義が不適切であると判断し、対応に疑問ありとして、この箇所を指摘した。『起源』の対応語一覧表では DEDR 3951 が参照されていたが、大野氏は、『検証』の中で “DEDR 3951” を “DEDR 3949” と改め、しかも、問題ありと私が指摘した「捧げ物で罪を除く」という語義を暗に削除し、代わりに TL の語義解説を第 1 義から第 5 義にわたって紹介している。そこには「捧げ物で罪を除く」趣旨の意味は示されていない。

しかしながら大野氏は、この語の辞書的な意味の背後に、「歌ったり祈ったりするだけでなく、神に捧げ物をして罪や過失を取り去るため祈願をすること」のごときニュアンスを認めたかのように見える(『以前』 p. 159、『起源』 p. 198、『検証』 p. 64)。氏は、『検証』 p. 64 で、DEDR などの中からタミル語の語彙と語義を抽出し、各々日本語の単語と対応させている。以下の表がそれである。

DEDR	タミル語	日本語
	3972 paru (大きくなる)	Faru (張る)
	3972 paru (ふくれる、腫れる)	Faru (腫る)
	3949 paravai (海)	Fara (原、海原)
	3949 para (広くて平らな表面)	Fara (原)
	3949 para (はるか遠い)	Faruka (遙か)
	3962 pari (切り離す、ばらばらにする)	Farara (散るさま)
	3949 para (雲や光が拡散する)	Faru (晴る、雲が拡散する)
	3951 paravu (罪障を消滅させる)	FaraFu (祓除する)
TL	2503 paravukatan (祓えに差出すもの)	FaraFētumönö (祓物)
	3970 pariyam (支払金)	FaraFu (支払う)

大野氏は、タミル語の語根 “par-” と日本語の語根 “Far-” とが「対応」するとの認識に立ち、上のような対応表を提示している。氏によれば、両者に共通する根本的な意味は、「ふ

くれあがって来て、ぎりぎりまでふくると、拡散してバラバラに、雲散霧消してしまうこと」であり、そこからさらに進んで、「罪科や過失を雲散霧消させるべく、神に物を捧げ、神にたたえ言を述べてハラフこと」であるという（『検証』p. 54）。

この表から、タミル語の部分に関連して、いくつかの問題点が浮かび上がる。まず、*DEDR* 3949 の“para”には、「広くて平らな表面」の如き意味はない。第一に、“para”は名詞ではなく、動詞である。大野氏は、*DEDR* で与えられている語義“be broad (as a plane surface)”を、括弧内の部分を強調して再編したのである。“para”を敢えて名詞とすることで、日本語の“Fara”（原）との対応を印象づけたかったのであろう。

大野氏は、上表で、やはり *DEDR* 3949 の“para”を「はるか遠い」としても紹介している。しかし、このような語義は当該エントリーのどこにも記載されてない。言わば架空の語義である。このような語義を敢えて造り出し、日本語の“Faruka”（遙か）と対応させているのである。

さらに、上の対応表は、同じく *DEDR* 3949 の“para”に「雲や光が拡散する」という意味があるとしているが、この場合、拡散するのは雲や光に限るまい。現代語の“para”から類推しても、臭い、音、病気、木の根や枝、さらには噂や名声に至るまで、可能性は多岐にわたる。大野氏は、語義に作為を加え、拡散する主体を「雲」や「光」として敢えて特定し、限定的に提示することによって、氏の唱える日本語“Faru”（晴る、雲が拡散する）との類似に説得力を持たせようと工夫したのであろう。

さらに氏は、*DEDR* 3951 の“paravu”に「罪障を消滅させる」という意味を与えているが、当該のエントリーに当たれば一目瞭然なように、“paravu”には“worship, reverence, adore, sing”の語義しか掲げられていない。宗教・思想史的な事実からも、「罪障を消滅させる」ような語義は考え難いことは、後述する通りである。日本語の対応語彙との意味の類似を強調するための作為でもあろうか。

TL, p. 2503 から挙げられている“paravuk(k) aṭan”にも同様の問題が付随している。これものちに詳しく考察するであろう。（同語の綴り上の問題点については、※で指摘するので、この項目の末尾をご覧ください。）

DEDR 3970 の“pariyam”の語義も問題である。氏は「支払金」などとしているが、そのような語義は *DEDR* には記載されていない。あるのは“brideprice, hire of a prostitute”、すなわち「花嫁代償（婚資）」ないし「売春婦への手当」である。大野氏は、“pariyam”を敢えて一般的な「支払金」として提示することで、日本語“FaraFu”（支払う）との一致を際立たせようとしたのである。*DEDR* 3970 のエントリーの中でも紹介されていることであるが、この語については、フランス印度学の重鎮 Jean Filliozat が、「接触」を表すサンスクリット“sparśa”、ないしパーリ語“pharisa”からの派生を説いていることに注目したい。そうだとすればインド・アーリヤ語起源の語彙ということになり、共通の語根云々の議論は意味を為さなくなるからである。大野氏は、“pariyam”の語源を論ずるのであれば、*DEDR* 中のこうした記述を無視することなく、Filliozat によるフランス語の当該論文を検討・吟味し、問題点を克服した上で提案されるべきであろう。

以上のような個々の語彙の難点に加え、大野氏による上の表には大きな疑問を差し挟まざるを得ない。すなわち、*DEDR* 3949, 3951, 3962, 3970, 3972 をすべて同一の語根 “par-” から派生したものと見なすことの是非である。問題を限定して考えてみよう。同じ語形の “paravu” という語が *DEDR* 3949 と 3951 の両方に現れる。前者には「広がる、広げる」という意味、後者には「崇拜する、称揚する、歌う」という意味が与えられている。*TL*, p. 2503 を見ると、これら全体が一つのエントリーで扱われていることがわかる。*DEDR* の編者は、*TL* で同一エントリー中で扱われていたこの語彙について、ドラヴィダ諸語の cognates の状況・意味内容を踏まえて同一の項目内で説明することを控え、意味的に二つの範疇を設け、一方を 3949 のエントリーに、もう一方を 3951 に分類して提示したのである。それだけ、編者たちは単一の単語家族に統合することに慎重を期していることになる。「広げる、広がる」と「崇拜する、称揚する、歌う」の間に意味的な連関を敢えて求めず、事実上二語として扱ったのである。この態度は、*DEDR* に先立つ *DED* についても同様である (*DED* 3255, 3257)。大野氏の場合、日本語 “Faru”、“Fara”、“Faruka”、“FaraFu”、“FaraFetumono” を統合的に（同一の語源から）解釈できるとの見通しに眩まされ、あるいは統合的に解釈したいという欲求に駆られてタミル語を観た結果、タミル側ないしドラヴィダ側の諸事実が、日本語に引きずられる形で解釈され、歪曲された嫌いはないのであろうか。Kothandaraman 教授は、大野氏の “para(vu)” をめぐる（統合的な）解説に、「paravu は spread である。それがどうして praise、extol（賞賛する。賞揚する）になるのか心にかかっていた。神に offer し、praise して guilt を sweep することを祈る。なるほど」と述べ、*TL* を広げて頷いたという（『検証』p. 54）。この時、Kothandaraman 教授には、*DED* か *DEDR* のほうも是非参照して欲しかったと思う。

ところで大野氏によれば、日本語 “Far-” とタミル語 “par-” に共通する意味内容は、前述のように、「ふくれあがって来て、ぎりぎりまでふくると、拡散してバラバラに、雲散霧消してしまうこと」であり、そこからさらに進んで、「罪科や過失を雲散霧消させるべく、神に物を捧げ、神にたたえ言を述べてハラフこと」であるという（『検証』p. 54）。すなわち、大野氏が *DEDR* 3949 の “paravu” と同 3951 の “paravu” を敢えて一つの語根として解釈・処理する理由も、上述の論理に拠っているのである。しかし、そもそもタミルの宗教的伝統において、自らの劣等と罪障の意識を以て、神を崇拜し、罪過の解消を神に祈り願う精神的態度が一般化するのは、バクティ（帰依信仰）が盛んになって以降、すなわち早くとも 7 世紀頃からのことと考えるのが常識的である。⁽⁶⁾ バクティ興隆の前夜に成ったと考えられる *Tirumukurūppatai* や *Paripāṭal* にも、このような考え方は未だ顕在化していない。ましてや、氏が問題にしているはずのサンガム期（前 1 または後 1～後 3 世紀頃、大野氏によれば“前 2～後 2 世紀”）には、このような神観念や宗教的情操は未だ発達を見せていない。宗教史上の事実関係からしても、大野説は説得力を欠いている。“paravu” なる語に、はじめから⁽⁷⁾ そうした含意があったとは考えにくいのである。⁽⁸⁾

氏は、“paravu” が「祓う」の含意をもつ証拠として、『以前』p. 159 で、“paravukkaṭan” という複合語の例を掲げ、『起源』p. 198 では出典も示して論証に努めている。この用例は、

TL, p. 2502 に掲げられたものをそのまま流用したものであるが、氏の「*Tolkāppiyam* の註釈、十世紀」という出典の記述はあまりにも簡略に過ぎ、箇所の特定は容易でない。誰による注釈なのかも明示されて然るべきであろう。これではわざわざ典拠を掲げた意味があるまい。しかも、紀元後10世紀ともなれば、上に述べたような、バクティ的な宗教情操がタミルの精神文化万般にわたって浸潤していた時代であるから、この例を証拠に掲げて“paravu”の語に「何かを捧げて神に祓いを祈る行為」との原義を認定することは危険である。TL は、“paravukkaṭaṇ”に“oblation in fulfilment of a vow”との語義を与えている。文字通り「誓願の成就を願って供物を奉納すること」を意味する。大野氏は、「祓えに差出すもの」という意味を与えている（『検証』p. 54）。しかし、そもそも“paravu”に「何かを捧げて神に祓いを祈る行為」のごとき意味を認めたいのであれば、“paravukkaṭaṇ”など複合語も含むより古くかつより多くの用例を検索し、それをもとに議論を進めるべきであろう。

さて、“paravu”の語それ自体の意味内容の問題に立ち返り、大野氏の具体的な引用箇所をもとに、さらに考えてみることにしたい。氏が『以前』p. 159 と『起源』p. 198 で“paravu”の用例として引いているのは、“*Paripāṭal* 2”（この項目末尾の※も参照）である。大野氏が、『以前』と『起源』において、“*Paripāṭal* 2”からのものとして掲げている文の和訳は以下のようなものである。

悩ムナ我が心ヨ。我々ハ礼拝シ歌イ、家族ト共ニ祓（par-avu）ヲシヨウ

（下線は大野氏）（『以前』p. 159）

悩ムナ我ヲノ心ヨ。我々ハ礼拝シ、我々ハ戦イ……家族ト共ニ paravu（祓へ）ヲシマス
（『起源』p. 198）

2例とも同じ箇所の訳例と推定されるが、両者を比べると微妙に異なっていることがわかる。それはともかくとして、恐らく大野氏が訳出したと推定される部分の原文を、まず下に掲げよう。読者に少しでもわかり易くするため、sandhi（単語同士の音韻結合）をはずし、単語ごとに切り離して表記することにする。

kaliyil neñcinēm ēttinēm vālttinēm/
kaṭumpoṭum kaṭumpoṭum paravutum/ (*Paripāṭal* 2: 74-75)

仮に私なりの逐語的な和訳を施せば、例えば次のようになろう。

（我らは）偽りなき心をもち、（汝 [=ティルマール神] を）讃え、言祝ぎたり。
眷属とともに、眷属とともに、（我ら、汝を）称揚せん。

個々の動詞の時制の理解に伴う相違点などについては暫く措くこととし、問題の“paravu”に的を絞って考えてみよう。この箇所を含む一節において、“vaṇaṅkinēm”「我らは拝

めり」(v. 73)、“*ettinēm*”「我らは讃えたり」(v. 74)、“*vālttinēm*”「我らは言祝ぎたり」(v. 74)、“*paravutum*”「我らは称揚せん」(v. 75)等の動詞表現が頻出するが、何度も繰り返し、神を言祝ぎ、祈願し、崇拜する気持ち・様子を強調するために用いられたものである。そのことは75行目に、“*kaṭumpoṭum kaṭumpoṭum*”(眷属とともに、眷属とともに)と、同じ表現が2回重ねられていることから首肯される。同じような意味を表す語を波のように反復し、繰り返し崇拜する感じを強調しているのであって、“*paravutum*”に他の語と異なる別個の語義・含意を期待しているわけではない。文脈から判断しても、むしろ積極的に神を称え拝み祈る姿勢が表現された部分と見なされ、大野氏のように、自己の罪障の祓いを目的とする崇拜行為・儀礼行為を読みとるべき必然性は無い。このことは、当該箇所以後続する行(v. 76)に示される、祈りの具体的内容——「我らの智慧が偽りを知ることがありませんように!」、換言すれば「我らが“まこと”を知りますように!」——からも傍証されよう。バクティ的ヒンドゥー教が隆盛になって久しいタミル中世の大注釈家 *Parimēlaḷakar* (14世紀頃)の定評ある註釈ですら、原文の中に“罪障の祓い”に類する観念は一切認めていない。

F. Hardy は、南インドのバクティ的ヒンドゥー教の成立と初期の展開を、クリシュナ信仰の側面から明らかにした研究者である。彼は、*Paripāṭal* 及びそれに続く初期のバクティ文献(特にヴィシュヌ信仰と関連する宗教詩文学)に頻出する“*paravu*”、“*ettu*”、“*vālttu*”、“*vaṇaṅku*”、“*tolu*”等の動詞群に着目した。Hardy によれば、これら一群の動詞は、タミルの民間信仰の形態にも根ざした、神を讃え、歌を歌い、崇拜する一連の儀礼行為を表現するものであるという。これらの動詞は、⁽⁹⁾“罪を祓う”ことなどより、積極的に息災や神との合一を願い、歌い踊って神を称揚する崇拜行為と関連しているのである。

要するに、大野氏の解釈は、日本語“*FaraFu*”(祓う)とタミル語“*paravu*”とを対応させたいという氏の強い願望ないし前提がまずあり、日本語“*FaraFu*”からの類推で“*paravu*”の語義を求めようとしたことによって誘導されたものである。日本語とタミル語を平等・対等に扱い比較した結果ではない。(両言語を対等に扱わず、日本語の観点からタミル語を歪めていることについては、助詞の考察を例に、既に第13集 p. (42f.)で再三指摘してある。)

※『以前』p. 159では“*paravukkaṭaṇ*”、『起源』p. 198及び『検証』p. 54では“*paravukkaṭaṇ*”とあって、表記に不統一が見られる。どちらかに統一して頂きたい。辞書的には前者が正しかろう。

さらに、本文中でも示唆したことであるが、氏が『以前』p. 159と『起源』p. 198で、例文の典拠として掲げている文献 *Paripāṭal* についての表記が不適切であることを指摘したい。氏は“*Paripāṭal* 2”と記すのみであるが、この長詩は全体で76の verse から成り、どの行かを特定しなければ、正しい出典の表示にはならない。(同様の難点は、前出の大野晋『神』p. 96においても見られる。)出典・典拠の正確な表記は、研究にとって基本的な事項と思われるのだが、実は、この項目(28)に限らず、原典の当該箇所についての不正確・不十分な記述は、大野氏の「タミル語=日本語」関係の著述中にたびたび現れ、例えば本稿で問題にしている対応中では、(3)、(6)、(12)、(21)、(22)、(38)、(39)の諸項目に見られる。各項目における私の議論を参照されたい。

(29) Faru (壅る) (古語) —— pari (雑草を刈る) (p. 14)

タミル語 “pari” の「雑草を刈る」という語義が不適切であるから、この項目に疑問ありとして指摘した。他動詞としての “pari” は「摘み取る」を原義とし、“(to weed)” の意味は部分的に見出されるものの) とりたてて「雑草を刈る」意を表示する語ではない。日本語の「壅る」との一致を際立たせるため、氏は“雑草”の部分**を強調しようとしたもの**と考えられる。氏が例として掲げている文献 (*Nālaṭiyār*) も、成立の上限が紀元7世紀頃と新しく、用例として相応しいものとは見做し難い。

※『検証』p. 54の出典の表記に “*Nālati.*” とあるのは、“*Nālaṭi.*” とすべきであろう。

(30) Faru (貼る) —— parru (貼る) (p. 14)

大野氏が “parru” について掲げる「貼る」の義に問題ありとしてリストに指摘した。“parru” は、基本的に「執る」とでも訳すべき語で、文字通り「手に執る」意味を表示したり、(心理的・精神的に) 何ものかに「こだわる、執着する」の意を表す。「貼る」に類する義も皆無ではないが、些末的である。『検証』p. 55では、大野氏は「貼る」意を強調すべく、(より説得力があると感じられたのか) これまでの動詞に代わり、名詞 “parru” の方を持ち出して解説を加えている。しかし、名詞 “parru” についても、何かをどこかに「貼ること」という意味はごく一部に過ぎず、即物的な行為としては「つかむこと」、精神的・心理的には、何ものかに「こだわること」「こだわり」を表示する。そもそも『起源』の対応語一覧中で “parru” を動詞として掲げておきながら、『検証』ではそのことを伏せ、一転して名詞として解説していることも、首尾一貫性を欠いている。

(31) FaFu (這ふ) —— pāvu (這う) (p. 14)

大野氏は、『起源』中で、タミル語 “pāvu” を「這う」として掲げているが、「広がる」が基本義であり、日本語の「這う」とは一致しない。

ところが、『検証』では「這う」の意がいつの間にか隠され、代わって、“pāvu” の意として「広がる」「拡散する」「蔓草が地上に広がる」が挙げられている。タミル語 “pāvu” は、現代語に至って「地面に敷き詰める」「地に足をつける」「たねを播く、植物を植える」など、地面との関連が強まるが、*DEDR* 4088 に掲げられた関連語 “pāy” などとも参照すると、本来、水・暗闇・光などが周囲に拡散していくさまを表す語彙だったと思われる。大野氏は、日本語「這ふ (FaFu)」が「タミル語の用法と全く一致する」としているが、日本の古典に当たって提示している例は、いずれも「(蔓草などが) 一面に広がる」意を表すもののみで、対応語とされるタミルの単語と意味的に“全く一致”しているとは言い難い。

(32) Faka (墓) —— pokkaṇai (穴・墓穴) (p. 14)

大野氏は、『起源』の対応語一覧中で、タミル語 “pokkaṇai” を「穴・墓穴」として提示している。「墓穴」の意はないはずであるから、疑義ありとして指摘した。

指摘をうけ、大野氏は、『検証』のp. 19で、「大野は未だ pokku または pokka が「墓」

(ハカ) にぴったりと当たっている実例をタミル語には見出していない」と述べられている。だとすれば、そもそも「墓穴」という訳語を敢えて対応語表の中に記したこと自体、適切さを欠いていたことになろう。

(33) *fitafi* (額髪・額) —— *pittai* (額の髪)

(p. 14)

タミル語 “*pittai*” の意味を、『起源』では「額の髪」とし、日本語「ひたひ (*fitafi*)」と対応させていた。“*pittai*” は「額の髪」の意味ではないから、その誤りを指摘したつもりである。

ところが大野氏は、筆者の指摘を受けるや、『検証』の中でその意を黙って引き下げ、代わりに “*lock of hair*” (毛髪の束) という訳語を与えている。確かに、タミル語 “*pittai*” は、「髪の房」を意味するものの、主に男性のそれを表す。大野氏は、タミル語の “*pittai*” と日本語「ひたひ」の対応関係を強調するため、“*pittai*” に「額の髪の前につける花輪」などという意味を充てているが、Kothandaraman 教授の教示によるとの旨を記すのみで、典拠についても用例についても一切沈黙している。「額の髪の前につける花輪」という意味を指示する文例を是非お示し頂きたいと思う。

大野氏は、長田氏に対する反論の中で、自分が作り出した語義は一切提示していない旨を豪語されている(『検証』p. 117)。しかしそれにも拘わらず、実際には、*DEDR* にも *TL* にも与えられていない意味を掲出している場合が散見されるのである。前項 (32) もそうであるし、ここ (33) もその例に漏れない。辞典に掲げられていない語義を敢えて提示するからには、他人の言をそのまま鵜呑みにするのではなく、然るべき典拠を掲げるか、(現地で採集した語義ないしインフォーマントからの情報であれば) その旨の十分な説明を施して欲しいものである。

大野氏には、この事例に限らず、ご自分の所説に説得力をもたせるために、Kothandaraman 教授、Sanmugadas 夫妻、その他の言を、金科玉条のごとくに引用されている場合が目立つ。また、これらの人々を納得させたことを、手柄話のように紹介されている。そうすることによって、自己の所説に説得力を付加しようという手法である。これに対しては、筆者を批判する大野氏ご自身の言を、ここにそのまま紹介しておきたい——「山下氏は Emeneau、Rajam その他の学者の論文を数々引用して、西欧あるいはインドの学者がこう言っているのだから、大野の論はダメなものだという方向へ導く。しかし、伺いたいのだが、山下氏は、それらの学者の論はどこまで正しくて、どこは間違っているのか、御自身で検証なさったことがあるのかどうか」(『検証』p. 311)。大野晋氏こそ、他の学者、しかもドラヴィダ比較言語学ないしタミル古典文献学を必ずしも専門としない現地研究者の賛同をもって良しとし、彼らの言を、十分な客観的証拠を掲げることなしに無批判的に援用し、自己の所説を支えるものとされている。批判されるべきは、一体どちらであろうか。

(34) *rina* (田舎) —— *pin* (後背地)

(p. 14)

大野氏は『起源』において、タミル語の “*pin*” に「後背地」なる訳語を与え、日本語

“rina”（ひな）と対応させている。この“pin”に単独で「後背地」の意味を与えるのは不適当であるから、問題のある対応例として指摘した。

ところが、大野氏は、『検証』p. 56で、筆者が問題とした「後背地」という語義を黙って引っ込め、“back, rear part, end as in place or time”など、DEDR 4205 に挙げられた意味を掲げて、筆者の指摘をかわそうとされている。肩透かしを食らわされた感が強い。

※さらに、大野氏の『検証』p. 56に見える新たな誤りを指摘したい。6行目の“pintu”は、“pintu”が正しい。また、9行目の“pānar”の語に、次行で「笛吹き」と訳されているが、“pāṇan”と称される古代の吟遊詩人に付き物の楽器は、笛ではなく、“yāl”と呼ばれる弦楽器（リュート属）の一種であることは、古代タミル研究にとって常識的な事項である。

(35) fine（古びた）——pin（古い時間） (p. 14)

大野氏は、『起源』において、タミル語“pin”を「古い時間」と解し、日本語「ひね（fine）」と対応させている。“pin”の語義が不適当として、筆者はこの対応の無効を指摘したつもりである。

この論点も、『検証』中では隠蔽され、「古い時間」という訳語は、いつの間にか抹消されている。そもそも、“pin”が「古い時間」などという意味をもつこと自体、考えにくい。大野氏の所謂「古い時間」を「以前の時間、過ぎ去った過去」のごとき意味にとれば、むしろ“pin”の対語に当たる“mun”のほうが相応しかろう。

(36) ruta（蓋）——putai（蓋） (p. 14)

『起源』中で、大野氏はタミル語“putai”を「蓋」として紹介していた。実際には、日本語の「蓋」に相当すべき意味はなく、名詞では「隠すこと」「隠されたもの」「隠し場所」等の意味になる。これ故、この対応を疑問であるとして指摘した。

ところが大野氏は、問題化されたと見て取るや、『検証』p. 56で「蓋」という名詞を闇に葬り、その代わりに、“to bury, to close, cover”という動詞の語義を紹介し、丁寧に「埋める、ふさぐ」と、それに対する訳語まで与えている。（大野氏が“close”としたのは、下に見るように“clothe”の誤りである。）これは、大野氏も述べるように DEDR 4509 からの引用であるが、そうであれば、正しく“to bury, hide, conceal, cover, clothe, speak in parables, inlay”と、全体にわたって意味を表記すべきである。自らの見解に好都合な部分のみを紹介し、不都合な部分を読者の目から敢えて遠ざけようとする態度は、その語が根本的に意味するところをくらませ、誤った議論に道を拓くものである。

(37) Föra（洞）——pulai（洞穴） (p. 14)

『起源』中では、上のように、タミル語“pulai”が「洞穴」とされ、日本語「ほら（Föra）」と対応させられている。（これは『以前』p. 104 でもほぼ同様である。）しかし、“pulai”の訳語として、「洞穴」は不適当であるから、この箇所を問題ありとして指摘した。

大野氏は、『検証』の中では、この「洞穴」なる訳語を断りなく引っ込め、代わりに、

DEDR 4317 に拠ったと思われる “hole, tube” という語義を掲げ、丁寧に「穴、管」と訳語まで与えている。しかし、そうだとすれば、DEDR の当該箇所に掲げられている “hole, tube, entrance, gate, forest path, by-path, narrow path” を、読者の前にそのまま提示すべきではあるまいか。最初の2義だけをことさらに取り上げ、“pulai” を「穴、管」として定義してしまっただけでは、語の本質をとらえたことにはならないであろう。提示された用例にしても、「洞穴」を表している保証は何もない。項目(36)と同様、自らの唱える対応関係に説得力を付与するための小手先の操作という印象を免れない。

(38) **raku** (吐く) —— **vākku** (吐く)

(p. 15)

大野氏は、『起源』中で、タミル語 “vākku” を「吐く」として紹介し、日本語「吐く (Raku)」と対応させている。しかし、“vākku” を「吐く」とすることに異議があるとして、私はこの箇所を指摘した。

氏は、この示唆をうけ、『検証』の中で「吐く」という日本語訳を黙って取り下げ、DEDR 4317 という典拠を掲げつつ、タミル語 “vākku” を、“to pour; mouth, the organ of speech, word, speech” とし、わざわざ「口から出す、口」という日本語の説明まで付加している。ところが、DEDR の当該箇所のどこを見ても、“mouth, the organ of speech, word, speech” などという語義は見出せない。その理由は簡単明瞭である。上記の意味での “vākku” は、DEDR では、サンスクリットの女性名詞 “vāc” (特にその単数主格・呼格形 “vāk”) から派生したものと想定されているからである。TL にも、その旨が示唆されている。大野氏は、タミル語の名詞 “vākku” の語源に関する DEDR 等の慎重な態度を無視し、また名詞 “vākku” がサンスクリット起源とする見解も紹介しないまま、あたかも DEDR 4317 にそうあるかのように、“mouth, the organ of speech, word, speech” という語義を提示している。事実を歪め、我田引水的な態度に終始するものとの批判を免れない。

※因みに、この項目に関して、氏の引用する出典の表示は不十分である (『検証』p. 56)。Cilappatikāram 第3章の末尾の venpā に現れる旨を明記して欲しい。例文中に、“vākkināl” とあるのも “vākkināl” の誤りである。言うまでもないが、この “vākku” も「吐く」の意の動詞とは語源を異にしている。

(39) **kabaFu** (かばふ) —— **kāval** (保護する)

(p. 16)

大野氏はタミル語 “kāval” を、動詞として提示している。これが不適切として指摘した。

大野氏は、私の指摘に対して、わざわざ「DEDR には名詞の意味しかあげていない。動詞としての意味は省かれている」と抗弁されている。しかし “kāval” は、「見張り」「防御」ないし「防御する(見張る)者」などを基本義とする名詞と見るべきであって、動詞として扱うべきではない。大野氏が『検証』(p. 57)に掲げる2例は、一つが名詞の用例、他の一つ (kāvalar) も、名詞 “kāval” から派生する名詞——文字通りには「“kāval” を行なう人」を表す——であり、ご自身の所説を支えるものとはなり得ていない。

※ついでに指摘しておくが、氏の掲げる二つの例文のうち、最初のものについて、“āyinaḷ” を

“ayinal”に、出典の *Nar.* 102: 9 を *Nar.* 102: 8-9 に改めるべきである。また、第二の例文については、出典の *Nar.* 98: 9 を *Nar.* 98: 8-9 に訂正する必要がある。

(40) maku (負く) ——makiti (負ける)

(p. 16)

大野氏は『起源』中で、タミル語 “makiti” (大野氏は “makiti” としているが、“makiti” の誤り) を「負ける」とし、日本語 “maku” 「負く」と対応させている。タミル語の “makiti” に「負ける」に類する意味はないから、疑問箇所として指摘した。

ところが大野氏は、『検証』中で、一転して “makiti=「負ける」を引っ込め、代わりに *DEDR* に記載されている “to be overturned” の意味を掲げている。さらに日本語 “maku” に、「負く」に加え「巻く」の意味も与えている。大野氏は私の指摘に真っ向から答えるのではなく、微妙に、しかも読者にわからぬよう巧みに、論点をすり替えていることになる。すなわち、いつの間にか、タミル語 “makiti” 「巻く」と日本語 “maku” 「巻く」の対応という形に置き換わっているのである。しかも、「タミル語 “makiti” は用例の極めて少ない……」(『検証』p. 57) と、逃げまで打っておられる。

※大野氏が、『検証』p. 57で、カンナダ語 “maguḥ” の意味を引用する中、“to turned, be turned, retreat” とあるのは、典拠 *DEDR* の記事に照らして記述が不正確であるし、英語も誤りを含んでいる。

(41) musiru (むしろ) ——muci (ねじりとる)

(p. 17)

タミル語 “muci” は、「弱る」「疲れる」「細る」を基本義とするので、大野氏の挙げる「ねじりとる」の義に問題ありとして指摘した。

大野氏は『検証』中では、“to wrench, twist” の義を紹介するが、実はこれらの語義は *DEDR* 4903 には与えられておらず、*TL*, p. 3235 にある他動詞としての “muci” の語義に拠っている。大野氏が掲げる用例も *TL* で紹介されているものと同じである。しかも、*Kaṃṣarāmaṇḍanam (Irāmaṇḍanam)* (12世紀後半) の *Cuntara Kāṇṭam* 697 (*Polil Irutta Paṭalam* 7) からのものようであるが、当該課題の考察に用いるにはやや時代が降り過ぎている。

※大野氏は例文中の “muṭittalai” を「髪を結った首」と解するが、「冠をつけた頭」が正しい。

(42) *mutu>butu (打つ) ——muṭṭu (ゲンコツで打つ)

(p. 17)

『起源』中でタミル語 “muṭṭu” を「ゲンコツで打つ」としているのに異議ありとして、この箇所を指摘した。“muṭṭu” は「攻撃する」「～に当たる」の意であり、「ゲンコツで打つ」の意はない。

大野氏は、私の指摘を受けるや、『検証』中で、何ら断ることなく “muṭṭu” を「ぶつかる、殴打する」と改めている。わざわざ “muṭṭu” の用例 (特に2例目の *Nālaṭiyār* からのものは、上限が紀元7世紀頃と新しく、当該研究において典拠とするには時代が降る感がある) を引用しているが、そこで用いられている “muṭṭu” も、「ゲンコツで打つ」とは、意味的にかけ

離れている。氏が『起源』で “muttu” に与えていた「ゲンコツで打つ」という語義は、一体どこへ行ってしまったのであろうか。

(43) *mōri > mori (鋸) — mul (鋸)

(p. 17)

大野氏は、『起源』中で、タミル語 “mul” に「鋸」の義を与えている。“mul” は、「棘」ないし「突起物」一般を表し、「鋸」とはまったく特定できないから、疑問箇所として指摘した。

ところが大野氏は、私の指摘を受けると、『検証』の中で「鋸」の意味を引っ込め、DEDR を参照して「いばら、鋭く尖ったもの何でも、突き棒」として紹介している。用例として掲げる *Mullaippattu* の一節においても、氏は、問題の “mul” を「鋭い棒」と訳し、「鋸」の意味を引っ込めている。“mul” を「鋸」と敢えて特定していた事実は、どこへ行ってしまったのであろうか。*Mullaippattu* の問題の一節は、氏が省略した部分も含めて訳せば（ややわかりにくい）「枝分かれした鋭い先端部分をもてる道具で、（象を調教するとき）に用いる言語である）サンスクリットに習い親しみ……」とでもなろう。“mul” は「鋭い先端部分（突出部、突起）」の意である。

(44) mutuki (襦袢) (古語) — mūtu (かたびらでつつむ)

(p. 17)

まず、タミル語が “mūtu” とあるのは “mūtu” の誤りと思われるので指摘しておきたい。『起源』の対応語一覧 p. 7 では、同じタミル語 “mūtu” (DEDR 5034) に、日本語の方言 “musu” (隠す) が対応するとされ、同じく一覧の p. 17 では古語の “mutuki” (襦袢=幼児に着せる衣) (の “mutu” の部分) が対応するとされている。同じ単語 “mūtu” に対して、前者 (p. 7) では「隠す」とし、後者 (p. 17) では「かたびらでつつむ」と解している。同じタミルの語（動詞）が、片や日本語方言 “musu” に、片や日本の古語の “mutuki” (の一部) に対応していることになる。さて、大野氏が『検証』p. (58) で、DEDR 5034 を参照しつつ、“mūtu” の意味について与えている説明を引用しよう。

タミル語 mūtu to cover, shroud, veil; to hide, to shut as the mouth, to surround (覆う、死衣をかぶせる、隠す、口をとじる、取り巻く)

タミル語 “mūtu” の基本義は、「(見えないように何かを何かで) おおう」「(開いたところを) とじる、ふさぐ」である。「死衣をかぶせる」という意味は特に存在しない。恐らく TL に “shroud” とあるのに目を付け、「死衣をかぶせる」と解したのであろうが、この場合の “shroud” は、「覆い隠す」の意と考えるべきである。タミル語の文脈次第で、「死衣をかぶせる」の意を帯びることも皆無とは言えまいが、“mūtu” それ自体がもつ意味ではない。氏が掲げる例文は、TL に掲げてあるものを流用したに過ぎないが、飽くまでも文脈上「死衣をかぶせる」と訳し得る事例と見ることができるし、出典が新しい（紀元後7世紀以降）のも気になるところである。

(45) amu (浴む) (古語) ——amil (浴びる)

(p. 17)

大野氏は、『起源』中で、タミル語“amil”に「浴びる」の義を充て、日本語“amu”との対応を強調している。“amil”の意味を「浴びる」とすることは不適當であるから、ここを問題箇所として指摘した。“amil”は、「しずむ」「もぐる」とでもされるべきところであろう。

ところが大野氏は、『検証』の中で「浴びる」の意を黙って取り下げ、DEDR 167 の意味記述をもとに“to be immersed, plunged; to sink (潜水する、水に飛び込む)”と置き換えている。氏は、「amir (ママ) は水に没することであるが、日本語の amu は bathe の意味で多少相違がある」と弁明されている。氏は、TLにある例文をそのまま引き、“amil”の用例を紹介しているが、そこではその語に「沈む」の義を与えている。氏が対応語一覧表の中で“amil”に充てていた「浴びる」の義は、暗に放棄されたということになろう。『以前』p. 214 では、“amil”に「沈む」及び「水につけられる」の意が与えられていたことを考えると、『起源』の対応語一覧は、両者の対応に真実味を付与するために、“amil”の語義を取って歪めたものと言わざるを得ない。

※なお、『検証』p. 68の下から1行目と3行目、及びp. 69の1行目の“amir”は、すべて“amil” (氏の表記法で示せば“amiṛ”) の誤植であろう。また、氏の挙げる例文の出典である *Tiruppukāṟ* は、*Tiruppukāṟ* (または*Tiruppukāl*) と改めるべきである。そもそも*Tiruppukāl* は、タミルのバクティ詩人 Aruṇakirināṭar (14~15世紀) の作品とされ、当該研究に用いるにはきわめて時代の降る資料と言わざるを得ない。

(46) imi (忌み・穢) (古語) ——im (墓地・不浄の地)

(p. 17)

『起源』中で、タミル語“im”が「墓地・不浄の地」とされているうち、後半部分すなわち「不浄の地」が意味的に不適當として指摘した。“im”は飽くまでも「墓地」であって、「不浄の地」の意味はもたない。もちろん文脈によっては、二義的にそうした含意を帯びることもまったく無いとは言えまいが、基本義を何より問題にすべきである。語の意味の本体と、その語が表示する事物に付随するイメージ・観念とをはっきり峻別することが肝要ではあるまいか。しかも、十分な文化史的吟味もせずに、はじめから日本的な死生観や死穢の観念をもってする類推で、墓地を「不浄な場所」、「忌み嫌われる場所」と決めつけ、「“当然”平素立ち入り忌避の場所である」(『検証』p. 69) としてしまう態度には疑問を覚えざるを得ない。日本語「いみ (imi)」に対応させようとする意図がまずはじめにあり、そこからタミル語“im”に「不浄」の含意を仮設したというのが真実ではあるまいか。氏の掲げる例文中の“imam”は、大野氏の解する「^{むつぎ}柩」ではなく、「その上に死体を横たえ火葬をするための、積み重ねた薪」とするのが一般的である。

(47) yasu (瘠す) ——ācu (やせる)

(p. 18)

大野氏は、ここでタミル語“acai”と日本語“yasu”の対応を問題にしているが、私が異議を申し立てたのは、『起源』中で氏が掲げたタミル語“ācu”と日本語“yasu”の対応である。

氏は敢えて対応関係をすり替えたとししか考えられない。せいぜい好意的に見ても、私の指摘で誤りに気づき、暗黙のうちに訂正を加えたというところであろう。さて、『起源』中で大野氏が“ācu”に与えていた意味は「やせる」である。“ācu”は、動詞ではなく、「小さいもの」「細かいもの」の意であるから、私が問題ありとして指摘したのである。

氏が、私の指摘を承け、『検証』中でタミルの対応語を“ācu”から“acai”に、断りなくすり替えていることは既述の通りである。氏が *Kuruntokai* 303 から引いた用例中の“acaiya”は、「やせた」とする氏の解釈とは異なり、「(餌を食べて) 翼を休める」ととるのが一般的である。

※ここで、『検証』p. 69の解説中に見られる *Tirukkuraḷ* のトランスクリプションの誤り (*Tirukkuraḷ* → *Tirukkuraḷ*)、及び *Tirukkuraḷ* の引用中の“acaiyiar_{ku}”の綴りの誤り (acaiyiar_{ku} → acaiyiyar_{ku}) にも言及しておきたい。

(48) yana (やな) (川で魚をとる設備) — aṇai (やな) (魚をとる設備) (p. 18)

大野氏は『起源』中で、タミル語“aṇai”を「やな、魚をとる設備」としている。これを疑問として指摘した。“aṇai”は「堰」「堤」ととるべきで、「やな」のような意味はない。

ところが大野氏は、私の指摘を受けたのち、『検証』中で、上記の「やな」の意味を黙って引っ込め、*DEDR* 122 を参照して、“aṇai”を“embarkment, dam; bank of a river; causeway”として紹介し、さらに括弧付きで「うね、川の堤防、土手道」という日本語の意味まで掲げている。『起源』で氏を与えていた「やな、魚をとる設備」という義はいったいどこに消えてしまったのか。

日本語のほうにも加工が施されている。『起源』では、日本語“yana” (やな、川で魚をとる設備) とタミル語“aṇai” (やな、魚をとる設備) との対応を説いておきながら、私の指摘を受けるや、『検証』中で、日本語“yana”の意味を「やな」から「堤、土手、^{やな}梁」と改め、やはり黙って意味を改めたタミル語“aṇai” (うね、川の堤防、土手道) との対応関係にすり替えているのである。しかしそれでも、大野氏は「魚をとる設備」にこだわりたいと見え、日本の梁の絵を描いて、Sanmugadas、Kothandaraman 両教授に示し、「全くそのとおりだ」という“証言”を引き出した旨を、わざわざ披露している (『検証』p. 60)。

(49) yari (槍) — ār (槍) (p. 18)

『起源』中で、大野氏はタミル語“ār”の意味を「槍」としていた。それが不適切として、この箇所を指摘しておいた。“ār”は、「鋭さ」「とがっているもの(こと)」を表し、「槍」ではない。

氏は、『検証』中で、“ār”を“sharpness, pointedness”と説明し直し、「槍」としていたことについては押し黙っている。「タミル語の中で、突き棒の例をまだ得ていない」と説明されているが、そうだとしたら、『起源』中でわざわざ「槍」とした根拠はどこにあったのか。クルク語の cognate である“ārci”からの連想による旨を述べておられるが、それだけを以てタミル語の“ār”を「槍」としているとすれば、自説の強化のために語義を敢えて歪めて

いるとの誹りを免れまい。

※ここでタミル語のローマ字表記の誤りも指摘しておこう。例文中で“nākkattu”とあるのは“nā-kattu”に、同じく“eyru”とあるのは“eyiru”に訂正すべきである。余談だが、大野氏は『検証』pp. (37)–(38)で、図示まで交えて古代タミルの槍なるものを説いて下さっている。タミル語・タミル文化の研究者にとって常識的な事項であるから、説かずもがなである。

(50) *yaraFi > yöröFi (鎧) ——ār (身につける鎧)

(p. 18)

『起源』中で、大野氏はタミル“ār”を「身につける鎧」とし、日本語“yaraFi”、“yöröFi” (鎧) と対応させていた。タミルの“ār”には上のような意味はないから、この対応例を疑義ありとして指摘した。“ār”は「身につける、着る」という意味を表す動詞として用いられる。名詞の「鎧」のごとき意味はない。ところが大野氏は、私の指摘を受けるや、『検証』中で、この「鎧」の意味を黙って引っ込め、“to wear, put on; to bind, gird”という *DEDR* の語義を示し、さらに「着用する、剣などを帯びる」(波線は筆者) という日本語の解説まで付けている。鎧と剣の違いは暫く措くとして、わざわざ辞典にない説明を補ってまで、日本語との対応関係を印象づけようとする態度は疑問視されなければならない。実際に、「鎧」ないし「剣」を強く示唆する例文に事欠いたと見え、氏が掲げた用例は「巻キツケタ (フンドシ……)」というものであった。

さらに、改変は日本語の対応語にまで及んでいる。『起源』中で、問題の“ār”に対応するとされていた日本語は“yaraFi”、“yöröFi”であったのに、『検証』中では、(タミル“ār”が動詞であることが動かせないことから) 動詞の“yaraFu”、“yöröFu”に何の断りもなく訂正されている。以前にお書きの内容を訂正されるのであれば、その理由を読者に断り、正されるのが筋ではあるまいか。このように、対応語とされていた語を手直しされる場合などは、なおさらである。

(51) wasa (輪) (方言) ——vaṭam (輪)

wa (輪) ——vaṭam (輪)

(p. 20)

大野氏は、タミル語“vaṭam”を『起源』中では「輪」として提示していた。語義が不当であるから、問題箇所として指摘した。“vaṭam”とは「綱」「紐」のことで、「輪」の意味はないからである。「輪」であれば、“(vaṭam”ではなく) “vaṭṭam”のほうが相応しい。

大野氏は『検証』p. (62)の中で、「輪」という意味を黙って引っ込め、*DEDR* 5220 に掲げられた語義をそのまま提示している。氏の掲げる例文中の“vaṭam”も、「輪」を表してはならず、ご自身も「太綱」と訳している。“vaṭam”=「輪」は、読者の知らぬ間に蓋をされている。

(52) wada (沿岸・入江) (古語) ——vaṇṭal (川や湖で岸を洗われている所)

(p. 20)

項目 (19) の説明に譲る。

(53) wara (藁) — varal (乾いた小枝や草)

(p. 20)

大野氏は、『起源』中で、タミル語 “varal” を「乾いた小枝や草」としているが、それが不適切として指摘した。“varal” は、基本的には動詞 “vara” の verbal noun 形で、「干からびること、干からびたもの」を表し、転じて「干魃、渇水」「乾いた土(地)」「枯れ枝」「乾燥肉、乾燥果実」なども示し得る。大野氏は自説に叶う語義の一部だけを抽出して読者に提示していることになる。氏は、マラヤーラム語 “varaṭu” を「乾いた草、乾草、わら」として掲げているが、DEDR を見る限り、そのような意味はない。“varaṭu” の意味として掲げられているのは、“dry (as fruit)” であり、“dry glass, hay, straw, a dry coconut; dry” の語義は、後続する “varaṭu” に与えられたものである。

大野氏は、タミル語 “vara” と日本語 “wara” (藁) との音の類似ないし対応に目をつけ、二語の起源的対応関係を提起したかったが、前者が動詞、後者が名詞ゆえ、苦肉の策として、前者の verbal noun 形 “varal” を、日本語 “wara” の対応の相手として持ってきたのではあるまいか。

氏が、「藁」を意味する “varal” の例に掲げる *Puranānūru* 75 の 9 行目の “varal” は、TL の “varal” の項目において “dried twig” (枯れ枝) の意として挙げられているものに過ぎない。通常「(薪などに用いる) 枯れ枝」を指す。

III. 『検証』における議論の手法と問題点の総括

大野氏は、『検証』において、極めて多くの紙数を費やし山下批判を展開されている。しかし氏による批判は、純粋な学問のレベルを踏み越え、自説の正当性を強調するための自己弁護の色彩を帯びたものとなっていることは否めない。議論の手法そのものに疑念を抱かせる箇所が散見するからである。恐らくそれらは学問以前の問題であろう。個々の問題点については、各項目中でそのつど言及してあるが、ここで改めて、それらを項目番号に沿って纏めておく。なお、複数の問題を抱えた項目があるので、番号に重複があることをお断りしておく。

- 『起源』の対応語一覧に対する山下の批判をうけ、『検証』中で、対応語の意味、品詞、ないし単語自体に変更・改変を加えておきながら、その旨が一切言及されていない事例
(9), (10), (11), (15), (22), (24), (27), (28), (30), (33), (34), (35), (36), (37), (38),
(40), (42), (43), (45), (47), (48), (49), (50), (51)
- その他のミスについて、山下の指摘に沿って『検証』中で修正を施しておきながら、その旨が一切言及されていない事例
(5), (15)
- (日本語との対応を強調するため) タミル語の語義が歪められていると考えられる事例
(1), (2), (3), (4), (6), (12), (13), (14), (16), (17), (18), (19), (21), (22), (23),

(24), (25), (28), (29), (30), (31), (33), (34), (35), (36), (37), (38), (39), (42), (44),
(46), (53)

●語義に対する例文の掲出を欠くか、不適切な用例を掲げている事例

(1), (32), (50), (51)

IV. むすび

以上、大野晋氏の論点につき、具体的な箇所・事例に即して検証を試みた。氏の議論は、少なくともタミル語に関する限り、幾多の問題に満ち、時に学問的な公正さ・客観性を疑わせるような記述の仕方がとられている。単語の本質的な語義を析出する代わりに、日本語の知識からする先入観や思い入れをもってタミルの対応語を選別し、その単語から一部の語義のみを抽出・強調する。枝葉末節的と見なされ得る語義であるにも拘わらず、あたかも基本義であるかのように提示されることも稀ではない。その言語、その単語の全体像を見ようとしていないのである。DEDR や TL を引用する場合も、時に編者たちの意図が等閑視されたり、引用するに当たって何らかの操作ないし工作が加えられる場合も散見する。書き換えなどが、何の断りも無しに行なわれていることも多い。Kamil V. Zvelebil 教授が、大野氏の DEDR からの引用を正確なものと評しているが、⁽¹⁰⁾ 精細に検討してみると、残念ながら、Zvelebil 教授による査定が遺漏に満ちたものであることが瞭然となるのである。

それらはすべて、自らが提案した対応関係を故意に強調し、自説に対して、より説得力を付与せんとする作為の現れである。しかも、巧妙な細工まで施され、かつ現地の学者の「お墨付き」も効果的に散りばめられているから、一般読者はよほど注意深く読まぬ限り、容易にあざむかれてしまうであろう。

岩波新書のような一般向けの書物においては、専門的な知識をもたない読者層を多く想定しなければならない。執筆に当たっては、そうした一般読者をミスリードせぬよう、細心の注意が求められるはずである。『解釈と鑑賞』を見よ』のごとき指示を与えてよしとするのではなく、新書版としての紙幅の制限の枠内で、誤解が生じる可能性を出来る限り排除する記述方法がとられて然るべきだったであろう。とりわけ、『起源』の巻末に付した対応語一覧は、いわば氏のご研究のエッセンスであるから、極めて慎重に作成して欲しかったと思う。これに関連して、大野晋氏はこう述べている——「大野の500語の表は対応語の Index にすぎず、訳語は、その見出しである。だから説明が不備なことはやむを得ない」と（『検証』p. 60）。それも一面事実ではあろう。しかし、大野氏が一覧表に精選・提示している語義は、「不備」というより「誤り」に満ちており、「やむを得ない」と言うには、あまりに作為的で、「アンフェア」と思わせるようなものまでを含んでいる。

さらに、一覧表に対する筆者の批判をうけて著された『検証』の中では、いつの間にか論点がすり替えられていたり、誤りが隠蔽されている例が少なくない。これらは、当該のテーマに関する学問的姿勢や方法論的な厳密さを疑わせ、イノセントな読者を二重三重にミスリードし兼ねないものである。

一方、一般の読者に限らず、ある程度の専門知識を身につけた者でも、*DEDR* や *TL* を常に座右に置いて一々の語彙・語義に目を光らせ、辞典の記述や原典の表記・意味内容と照合しながら読み進めない限り、惑わされてしまう危険性がある。大野氏の引用や意味の提示は、それだけ妥当性・信頼性を欠いているのである。

大野氏は、古代タミル語と日本語との間に500語の対応を確立したことを誇らしげに繰り返し、また、揶揄する調子で次のように言われる——「山下氏は16個の単語について実に多くの言葉を使って大野を論難し、その上で53個の実例を疑わしい単語として提示した。しかし、そのうちの何例が実際にダメであったか」と（『検証』p.(5)）。数字を挙げて対応例の多さを誇示したところで、この場合、まったく意味を為さない。同様に、覆された対応例が数にしていくつに留まったにしても、その数字は本質的な重要性をもたない。私は、大野氏の「方法」——換言すれば「対応の質」——を問題とし、限られた語彙に絞って、その問題点を「例示」したに過ぎないからである。氏の対応例を順次検討した結果、恐るべき頻度で方法や提示の仕方に重大な疑問が投げかけられ、批判に堪えぬものと判断されたならば、それ以降、誰が真剣に氏の所説に耳を傾け、吟味を続けようとするであろうか。私は、タミル語と日本語がまったく無関係であると頭から言い切るつもりはない。私の見る限り、大野氏の「方法」は、少なくとも文献学的にあまりにも多くの問題・弱点を抱えており、これをもって同系関係を確立することは難しかろうと申し上げているのである。

大野氏に改めてご提案したい。比較の質を高めて頂きたいと。「タミル語＝日本語同系説」をめぐる氏のご研究と議論の応酬が真に建設的で稔りあるものになることを、タミル学徒の一人として切に望みたい。

註

- (1) 大野氏は、『検証』p.(3)で、Zvelebil が氏の *Tolkāppiyam* の年代設定（紀元前3世紀）が古すぎるとの評を紹介しておきながら、同 p.(4)でも、紀元前とする年代論に固執している。*Tolkāppiyam* の年代を西暦紀元前にまで遡及させることには無理がある。このことについては、例えば、高橋孝信「*Tolkāppiyam* の成立について——タミル最古の文典の年代論——」『西南アジア研究』（京都：西南アジア研究会）No. 31, 1989年, pp. 20-37などを参照せよ。
- (2) *Narrinai* について、同じく Rajam Edition も確認したが、やはり“kalī”の語しか見えない。（なお Rajam Edition の入手については、東京大学の高橋孝信助教授のお世話になった。謝意を表します。）
- (3) この対応関係については、大野氏の近著『神』（「一語の辞典」シリーズ、三省堂、1997年10月刊）の中で再説され、同様の誤りが繰り返されている。1997年10月19日付の毎日新聞に丸谷才一氏による好意的な書評が掲載されるなど、誤った見解が定着することが危惧される。この書物については、近日中に何らかの形で批判を試みるつもりである。
- (4) 例えば、Hart の研究に詳しい（G. L. Hart, *The Poems of Ancient Tamil : Their milieu and their Sanskrit counterparts*, Berkeley, 1975）。

- (5) 古代タミルナードゥの「王」と南インド・ヒンドゥー教における「神」の間のイメージの交流と交錯については、辛島昇編 *Acta Asiatica* 74 (特集「南インドにおける王権」) 所収の英文の論放 “King and God : A Preliminary Study of Their Conceptual Linking in Pre-Devotional Tamil Texts” で検証を試みているので参照されたい (論文集は東方学会より1998年春に刊行予定)。
- (6) 例えば、G. L. Hart, “The Nature of Tamil Devotion”, in *Aryan and Non-Aryan in India*, eds. M. M. Deshpande and P. E. Hook, Ann Arbor, 1979 を参照せよ。
- (7) Hiroshi Yamashita, “Some Remarks on Tirumāl/Viṣṇu Cult in Early Tamil Religion and Literature : with special reference to the Tirumāl odes of the *Paripāṭal*” 『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所) 第126冊、1995年、pp. 111, 249f.
- (8) 山下博司「デイヴァムとカダヴル——古代タミル世界の神——」『論集』(印度学宗教学会) 1988年、pp. 57—72を参照。なお、この論文の掲載誌が大野晋『神』(三省堂、1997年) p. 134で、誤って引用されているので指摘しておきたい。
- (9) F. Hardy, *Viraha-bhakti : The early history of Kṛṣṇa-devotion in South India*. Delhi, 1983, pp. 211-3, 290.
- (10) カミュ・V・ズヴェレビル「再びドラヴィダ語と日本語について」『シンポジウム・弥生文化と日本語』角川書店、1990年、p. 177. Cf. 『検証』 p. (3)。